「とかくして」白川の関

宇城由文

一、序章

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日〻旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえむと、そゞろがみの物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲りて、杉風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置。

この冒頭文に現れる歌枕は「白川の関」と「松島」のみである。前者は「こえむ」であり、後者は「心にかゝりて」と目的を異にする。白川の関は「此関は、奥州の入り口、宮城郡の名所にて、古歌多し」（奥細道菅菰抄）ともあるように、細道の旅は白川の関に至って「旅心定り」、本格的な旅に突入する。ここに至るまでの序章的旅路で「前途三千里のおもひ胸にふさがり」などと記す旅の苦しみへの不安が現実となる。

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて旅心定りぬ。「いかで都へ」と便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳

に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ

卯の花をかざしに関の晴着かな　　曽良

とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の駅に等窮といふものを尋て、四、五日とゞめらる。先、「白河の関いかにこえつるや」と問。「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懐旧に腸を断て、はか〳〵しう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがに」と語れば、脇・第三とつゞけて三巻となしぬ。

「風流の」の句を考察した際に気になった箇所がある。

（注）白川の関越えを「とかくして」と記した表現である。『奥の細道』で芭蕉がこの表現を用いているのはこの例のみである。芭蕉が残した作品の中で、「とかく」は多く用例があるが、「とかくす」の形は後であげる例とこの箇所のみである。『奥の細道』の諸本をみてもこの箇所に異動は見られない。最初から確信して使用したものと考える。『奥の細道』の古注釈や近代以降の注釈をみても「とかくす」に特段の説明はない。作者がどのような意図をもってこの表現を用いたのか。気にかかるところである。

二、さまよう

白川の関を越えて主人公はさまよう。あさか山では、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、「かつみ〳〵」と尋ありきて

とさまよう。『曾良旅日記』に「あさか沼」の記事はあるが「かつみ」についての言及はない。笠島では、

此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過る

とあり、「藤中将実方の塚」を探してもいない。『曾良旅

日記』には「三ノ輪。笠島と村並テ有由、行過テ不見」と記すのみである。いづれも多少の誇張はあるかもしれないが、事実を大きく曲げた内容とは考え難い。それでは、白川の関はどうであろうか。

白川の関の描写は、「いかで都へと便求しも断也」で始まり、歌枕の世界に終始する。確かに、「単なる古歌の踏襲ではなく、古歌を踏まえつつ、俳諧的な転換を試みたり、新しいものを加えたり」（土橋寛『奥の細道幻住庵ノ記新釈』白楊社）してはいるが、歌枕の世界を出るものではない。古注釈の時代から指摘されており今更挙げるまでもないが、本文に見える歌枕の世界をここで反芻してみる。

便あらばいかで都へつげやらむけふ白川の関はこえぬと　　平兼盛

都をば霞とともに立しかど秋風ぞ吹しら川の関　　能因法師

都にはまだ青葉にてみしかども紅葉ちりしく白川の関　　従三位頼政

みて過る人しなければ卯花のさける垣ねやしら川の関　　藤原季通朝臣

東路も年も末にやなりぬらん雪ふりにけりしら川の関　　僧都印性

右は『類字名所和歌集』によるものであるが、すべてが『歌枕名寄』にも収められている。当時、その道に志を持つ人ならば、本文の諸句からすぐさまこれらの歌を連想するであろう。『俳諧類舩集』にも「白河の関」の付合いとして「秋風そふく、卯花、東路、日数ふる旅、霞、みちのく、紅葉、花」が並ぶ。手垢のついた語句がこのように列挙される事の意味を、読み手はどう受け止めればよいのか。

旅の本意と申は、仮令る中傍に仕候連歌成とも、心を都人になし候て仕候、初めて旅立時は或は相坂山の関をこえ、或は淀の川舟行衛とをく想像、海に漕出る折節は都の山を跡にかへりみて懐しく、昨日今日かの旅ながら月日をも送る様におぼえ、野路、山路の旅ねに古郷を恋ひ忍、草の枕の夢の中にも去方の事のみ見え

侍り、打覚ぬれば松風、浦波の音を恨み、人やりならぬ道ながら遥々と来ぬる事を悔み、帰るさには質もやせつかれ、麻のさ衣もしほれはてたる様に仕りならはし候。（至宝抄）

前記の歌に共通するものは、遠く離れた都への郷愁であり、ここに到るまでに要した日数の長さである。歌枕としての白川の関の本意は、まるで地の果てに来た如き不安と、それ故に生じる都への限り無き郷愁である。「心許なき日数」もその意味で受け止めるべきであろう。「旅心定りぬ」と記した直後に、このような旅の本意を連想させる語句を連ねる事自体に既に俳意が存在する。読み手も当然、歌枕としての白川の関のイメージで読み進めよう。では旅の実態はどうであったのか。『曾良旅日記』には

白河の古関の跡、籏ノ宿ノ下（一カ）里程下野ノ方、追分ト云所ニ関ノ明神有由。相良乍憚ノ伝也。

とあるのみで白川の関を越えたという記述は見られない。また曾良の「俳諧書留」には、

白河の関
西か東か先早苗にも風の音
我色黒きと句をかく被直候

とあり、元禄二年何云宛芭蕉書簡でも、

白河の風雅聞もらしたり。いと残多かりければ、須か川の旅店より申つかはし侍る。
関守の宿を水鶏にとはふもの　ばせを

又、白河愚句、色黒きといふ句、乍単より申参候よし、かく申直し候。
西か東か先早苗にも風の音

と、白川の関を探してさまよったかのごとき句を残している。また「白河の風雅聞もらしたり」は、会うことができなかった何云への儀礼的な言辞であろうが、白川の関を見つけられなかった無念も汲み取ることができよう。しかと白川の関を越えたのであれば、その事実をベースにした記述をするであろうが、作品には表れていない。

三、とかくして

「とかくす」「とかくものす」は角川の『古語大辞典』では、

① あれこれと事を行う。いろいろする。

② 出産・葬送など、特定の行為を、あれこれと手を尽すという婉曲な表現で示す。

とある。本文に当てはめるなら①の意味になる。しかし、文脈の中で「とかくして」を考える時、今少し丁寧な考察が必要であろう。「とかくす」の用例としてよく挙げられる『蜻蛉日記』には「とかくす」「とかくものす」の用例が七例見られる。

1 なほもあらぬことありて、春、夏、なやみ暮らして、八月つごもりに、とかうものしつ

2 かくて、とかうものすることなど、いたつく人多くて

3 走り井にて、破子などものすとて、幕引きまはして、とかくするほどに

4 かうぶりゆゑに、人もまたあいなしと思ふ人のわざも、習へとて、とかくすれば

5 「例の、ことはり、これ、とかくして」

6 大夫、いま一つとかくして

7 まへ、しり分きて装束けば、そのこと、太夫により、とかうものす

1は出産、2は葬儀、3は食事の準備、4は叙爵の儀の拝舞のわざを学ぶ準備、5は小弓に出る大夫の準備である。出産や葬儀など、具体的に書くことが憚られる場合は別として、他の例は、あえて記述する必要がない場合に使用したようである。これらの用例は『奥の細道』の「とかくして」には当てはめ難い。芭蕉も精読していたであろう『土佐日記』や『徒然草』の季吟古注釈をみるに、

かれこれしるしらぬをくりす。としころよくくらへつる人々なんわかれかたく思ひて、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。

とかくしつゝとは　舟にのる用意餞別の事ともなどなるべし

（『土左日記抄』傍線・句読点筆者）

しばしかなでゝ後ぬかんとするに大かたぬかれず。酒宴ことさめていかゞはせんとまどひけり。とかくすれ

ば、くびのまはりかけて血たり、たゝはれにはれみちて息もつまりければ、

（『徒然草文段抄』五十三段、傍線・句読点筆者）

最明寺入道、あるよひの間によばるゝ事ありしに、やがてと申ながら、ひたゝれのなくてとかくせしほどに、（略）なへたる直垂うち〳〵のまゝにて、（略）

とかくせしほどに　とやかくして連引せしとなり

（『徒然草文段抄』二百十五段、傍線・読点筆者）

ゴチック箇所は季吟による注である。『土佐日記』の用例は、季吟の注にあるように、「舟にのる用意餞別」のためで、とくに記す必要がない場合の用法である。ところが、『徒然草』の用法は少し趣を異にする。一例目は、頭にすっぽり被った足鼎を無理に引き抜こうとする様々な試みで、当該人物にとっては辛く苦しい事実である。結果も失敗に終わる。二例目は、最明寺入道（北条時頼）からお呼びがかったが、適当な直垂がなくてぐずぐずしている状態を表わしており、結局「なえたる直垂」でまかり出る。結果は無事に済むが、これも当該人物には不都合な事実である。もちろん具体的に描写しなくても読み手に伝わるので「とかくす」を用いたという点では共通するものである。『奥の細道』以外の芭蕉の用例は次の例のみである。

此秋は何で年よる雲に鳥

（略）されば此秋はいかなる事の心に叶はざるにかあらん。伊賀を出て後は心地すこやかならず、明暮になやみ申されしが、「京・大津の間を経て伊勢路にやおもむくべき、それも人々のふさがりてとゞめなば、わりなき心もいできぬべし。とかくしてちからつきなば、ひたぶるの長谷越すべき」よし

（『芭蕉翁追善之日記』、傍線筆者）

元禄七年九月二十六日の事、これは支考が芭蕉の言葉を伝えるもので、芭蕉自身の用例とは断言できないが、ここでの意味は「難しいとは思うができるだけの努力をしてみて」程の意味で、結果に対する見通しは明るいも

のではない。翌十月十二日、芭蕉は帰らぬ人となる。

四、芭蕉の作意

以上のように、出産や葬儀に用いる「とかくして」の用法が、具体的に書くことが憚られる場合とまではいかなくとも、当該人物にとって不都合な内容を指す言葉としても使用されるようになったと考える。白川の関は作品の構成上も非常に重要な箇所である。そこで、「あさか山」や「笠島」のように事実を踏まえて、おろおろとさまよったと書くわけにはいかない。かといってまるでの作り事は芭蕉のポリシイに反する。そこで選んだのが歌枕尽くしによる白川の関越えである。これはまた、歌枕「白川の関」の本意でもある。「とかくして」は一定の条件の中で内容を読み手に預ける用法でもある。「都をば」の能因の歌は、白川の関を詠んでつとに有名であった。またこの歌については、能因が都にありながら詠んで、それを隠すためにこっそり籠って、旅のやつれが出たかのごとく肌の色を黒くして歌を披露したという逸話が『古今著聞集』等に伝わりよく知られていた。曾良の「俳諧書留」の白河の関の句に「我色黒きと句をかく被直候」とあるのは初案がこの逸話をストレートに利用した句であったことを意味する。「とかくして」の内実は、等窮亭での主人公の言葉「長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懐旧に腸を断て、はか〳〵しう思ひめぐらさず。」にある。「とかくして」の用法としては先引した『芭蕉翁追善之日記』の用例に近い。

白川の関の歌枕尽くしの記述、能因の歌とその歌にまつわる逸話、「とかくして」の使用、その内実を示す主人公の言辞、これらのことから、当時の読み手は何を受け取ったであろうか。作者芭蕉が白川の関を確認できず、やむをえず歌枕によって白川の関越えを記したと解釈するのはそう困難なことではあるまい。芭蕉自身もそれを意識して記したものと推察する。「とかくして」は不都合な真実を覆うための用法ではあるが、虚偽を記すことなく巧みに白川の関越えを描きだしたといえる。かくして白川の関越えは一種の儀式として描かれたのである。これもまた俳諧であろう。

（二〇一八・一二記）

注

風流の初―『奥の細道』試論―　拙稿
論集近世文学4『俳諧史の新しき地平』（勉誠社）所収、平成4年9月刊

引用文献

奥の細道・奥細道菅菰抄・曾良旅日記・俳諧書留
萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道』岩波書店　一九九一年一二月刊
至宝抄　伊地知鉄男編『連歌論集　下』岩波文庫　一九五六年四月刊
芭蕉書簡　今榮藏著『芭蕉書簡大成』角川書店　二〇〇五年一〇月刊
蜻蛉日記　『土佐日記・蜻蛉日記』小学館　一九九五年一〇月刊
土左日記抄　寛永元年版本、架蔵
徒然草文段抄　寛文七年版本、架蔵
芭蕉翁追善之日記　『校本芭蕉全集』第九巻　角川書店　一九六九年五月刊